慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	昭和十一年秋季 豊橋岡崎方面旅行記
Sub Title	
Author	中井, 信彦(Nakai, Nobuhiko)
Publisher	三田史学会
Publication year	1937
Jtitle	史学 Vol.16, No.1 (1937. 4) ,p.147- 156
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19370400-0147

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

彙報

昭和十一年秋季 豐橋岡崎方面旅行記

十月卅一日午後十一時二十分東京驛發の列車で、指導教授伊木先生と共に、學生（會田倉吉、中井信彦、堀野滿治、齋藤咸、松尾善郎、鈴木泰平、淸水潤三、西岡秀雄（習日參加）、丹羽幸一）、出發。

驛頭に永野君が吾々を見送る。寢臺車は滿員である。まだそれ程寒くもない季節なのに、ヒーターの溫度を高めるので、車內は息苦しい程だ。明日に備へて充分睡眠を攝る爲、一同早くからと云つても、もう十二時だが、ベットに横になると力めて眠る事にした。座席で腰掛ながら眠る事から比ぶれば容易に眠れるわけだが、仲々さうはいかない。レールの繼目を車輪が渡る時起る音が腦の中樞を刺戟する。

鼾のコーラスが、土用波の樣に押寄せてはかへし、刺戟に拍車を掛ける。然し此等の雜音が何處か遠くで發生するのを微かに意識した頃、晝間の勞れが吾々を深い夢の谷へ追ひやつた。富士山も三保の松原も、すべて安らかに眠つて居たであらう。

十一月一日午前六時二分豐橋着。

驛前の岡田屋旅館に朝食を攝り、午前七時三十分鳳來寺鐵道の電車で長篠に向つた。

今日は天氣が良く、日曜日でもあるせいか遠出の客で滿員である。子供連れの家族。休日利用のピクニックの小團體、一日の休暇を我家の畑に汗を拭かうとする賴母しいカーキー色の勇士が、威嚴を正して車窓に眼を向けて居る。或は亦豐川稻荷に參詣するのであらう、月參りらしい妖艶な姿が電車の動搖に騷いで居る。之等人間のカクテルを乘せて、電車は紺青に晴れ渡つた三河平野を衝走る。美事な朱色の柿が車窓をかすめて、後へ後へと飛び去る。砥鹿神社の所在地である一宮の森を右に、信玄が鐵砲疵を負つたといふ野田城趾を左に見て、雜木林の丘の端に、信玄病院と記した大きな廣告に微笑を吳れつゝ、乘る事約一時間、漸く車外の景色に見厭きた頃、電車は長篠古城趾驛に着いた。乘客の半分を此處で棄てた電車は、輕快に北へ向つて姿を消した。

改札係であり、掃除夫であり、且つ驛長である驛員氏に長篠古城趾への道を訊ねた。『此の道を眞直ぐおいでると、すぐです』と田舍では公式的な親切さを以つて教へてくれた。此の驛に一時手荷物を預け、身輕になつて教へられた道を行く。成程近い。

城の入口らしい場所に「永正五年菅沼元成初めて之を築き、天正三年長篠役後廢城となる」と說明板が雨曝しになつて居る。先づ荒廢しきつた土壘に登つて、廢墟を顧望すれば、綿々絕ち難い懷古の情は、松籟水聲に戰國興亡の夢を描かせ、山河昔のまゝに榮枯盛衰の人生を無言の儘に物語つて『夏草や兵どもが夢の跡』の句も思ひ出されて感慨無量である。

長篠城趾は三河國南設樂郡長篠村大字長篠字市場及び岩城の間に在つて、大野川（三輪川、板敷川とも云ふ）が東より流れて、城趾の東部を繞り、岩代川（瀧澤川、寒狹川とも云ふ）が西北から流れて城の南部を劃り、南郭野牛門下で相合して豐川となり、海に注いで居る。大野、岩代兩川は共に幅が二三十間から四五十間で、水深は約八間あり、まさに三信の要衝を更に價値づける天險の要害である。

當城趾は東西二町五十間、南北二町十間で、四門九郭三樓櫓があつたさうである。本丸は西北に、二の丸と三の丸は其の東に、大手門は北に面し、本丸の南に搦手門があつたさうであるが、今は全く荒廢して內壕と土壘の一部が纔に殘つて居るだけである。

更に四顧すると、城を繞つて皆山である。東方に鳶巢　舟着の二山。東北に大通寺山。北に醫王寺山。西に雁峰　茶臼の二山がそれぞれ此の城を睥睨し、西南には彈正山があつて、爰は家康の陣地であつた。茶臼山は信長、醫王寺山は武田勝頼のいづれもが陣を張つた處で、雁峰山は今も尙戰國武勇談の一つを飾る鳥居强右衞門勝商が當城を拔け出て烽火の合圖を揚げたところである。其他名も無い丘陵、田圃、小徑も皆古戰場の一部である。

長篠城趾についての史實は略して、盡きない名殘りを惜みつゝもと來た道を**大演寺**へと引きかへした。此の寺には何等寺寶は無いが、只寺の裏庭に當る場所に「杯井」があるので知られて居る。卽ち馬場信房が大通寺山の陣に還つて、諸將士と共に名殘りの宴を開かうとしたが、あいにく陣中に酒無く、信房、昌豐、昌行以下馬柄杓で寺內の水を掬み、せめてもの死出別離の宴を張つたと云ふ謂れのある處である。井の上手に文政十一年五月三宇淵謹書の「大通寺盃井碑」がある。之を見て再び驛に歸り、預けた手荷物を各自受取つて、大野川溪流に沿つて北行した。佛法僧で名高い鳳來寺山を霧の晴れ間に望みつゝ、溪流の對岸に渡る爲、適當な場所を求めたが仲々良い場所が見付からない。やがて足場の惡い坂徑を下ると、渡場に出た。『小川の渡し』といふ川の石を積み重ね流れを一坦堰止めて、水のよどんで居るあたりに竿差して渡す樣である。見ると船頭は對岸で煙草を喫んで居た。『おーい』と手を揚げて呼ぶ聲が、溪流のせゝらぎに迷ひ込む、吾々の聲が聞えたのか、小舟を浮べて迎へに來た。一同乘る。四顧の風光は幾何學的實體を見厭きた吾々の眼には深淵な幽玄さを與へる。竿を二さし三さしするとザリ〳〵と舟底に音を立てゝ向岸に着く。これで一人金二錢である。都會生活者には珍らしい體驗である。舟を棄て、石段の樣な小徑を登る。やゝもすると木の根に靴を滑らせる。

登り切つたところは豐川街道である。今渡つた渡場を脚下に見て街道を南行する。左手に其の昔大久保彥左衞門が初陣の高名を立てた鳶巢山は、すべて紅一色で塗られ、時折百舌が癇高く鳴く街道の兩側に往古その儘の杉並木の眞上に、澄切つた秋空を、鳶が半圓を描いて飛ぶ。草鞋、脚絆、手甲、菅笠の道中姿が偲ばれる。驛を右岸に見た頃、中井君の親類に當る柿原喜三さんの家に着いた。此處でお茶を御馳走になつて一休みする。

程なく此處を辭し、家の刀自の案內で**鳥居强右衞門勝商**の墓へ向ふ。途中鐵道線路から約二百米程西北に離れた桑畑の中に、德

川家達公爵書「鳥居强右衞門磔死之趾」の石碑がある。之は卽ち長篠城が兵糧攻めにされた時、此の危機を岡崎の家康に言上しての歸途甲斐軍に虜へられ、稻のはざ杭に磔された場所である。假令身は虜はれ、槍の穗先に突き貫かれても、其の壯烈の膽と、忠節の志は、火の如き意氣を吐いて、三河武士の面目を飾つて居る。又軍事專門家は、熊本城の谷村計介と共に、模範傳令の双璧として賞揚し、寧ろ勝商を其の上位に置いて居るとか。

かくて程近い新昌寺の墓前に、この勇士の英靈を弔つた後、午前十時四十二分電車で鳥居驛を出發、豐川に向つた。

午前十一時三十分豐川驛着。驛前の食堂で中食をすませ、午後一時有名な**妙嚴寺**（一名豐川稻荷）に參詣、曹洞宗三寮所の隨一として全國に聞えた寺である。途中道路の兩側は料理屋、待合など、およそ寺には不似合な類の代表や土產賣店、娛樂場等が軒を並べて客を呼んで居る。

山門を一歩跨いで中に逐入ると、伽藍の規模の大きいのに先づ驚く。五十人程一列に並んで這入つても、まだ餘裕が有りさうな程廣い間口を有する玄關で來意を告げると、案內の役僧が出て來た。廣い廊下を幾度か曲つて三十疊の大きな座敷に通された。客間である。床間の白狐を描いた大幅が眼を引く。人間の丈よりも高い活花が威壓を加へる。何だか狐につまゝれて居る樣な氣がする。

待つ事須臾。拶挨に出られた方は山口忍裳と云ひ、偶然にも我文學部出身の先輩であつた。早速寺寶の拜觀を願つたが、氏が云はれるには書畫骨董に相當重要な物があるさうだが、寺務多忙の爲寶物殿の整理がつかず、遺憾ながらお見せする事が出來ないとの事で、折角の待望を傷ける事甚しい。併し寺內を隈無く拜見させて戴いた御好意には、深甚の謝意を表したい。尙同氏から贈られた『豐川閣妙嚴寺略緣起』と題するパンフレットを拔萃して說明に代へる。

抑々豐川閣は、審に圓幅山妙嚴寺と稱し日本佛敎十三宗の禪宗、其の又禪宗中の曹洞宗に屬する御寺で、豐川吒枳尼眞天はこの妙嚴寺の鎭守卽ち山門守護の善神であります。

曹洞宗の御本山は、有名な越前の永平寺で、永平寺の御開山は道元禪師であります。此のお弟子に、孤雲禪師、寒巖禪師、詮慧和尙がありました。此の寒巖禪師が、妙嚴寺の大先祖になられるので、曹洞宗でも、稀に見る系統の正しい歷史の古いお寺であります。寒巖禪師の弟子が鐵山士安——大州至梁——梅巖義東——華藏義曇と　弟子から弟子と一系連綿と相續いで、六代目、東海義易大和尙に至つたのであります。此のお方が卽ち妙嚴寺をお開きになつたのであります。（中略）東海義易禪師は、妙嚴寺御開創の折、山門の鎭守としてこれ（吒枳尼天）を祀られましたが、靈驗顯著にして、自ら信者の渴仰を集めました。當山の開基は今川氏であるが、今川氏は義元に至つて最も盛んになつて、寺も大に中興せられた。今川義元公の薨去の後は織田信長、豐臣秀吉、德川家康の如き名臣武將は皆篤く尊信せられました。別して文祿年間、豐太閤の朝鮮征伐に當り、九鬼嘉隆をして多くの軍艦を造らしめました。嘉隆は常に妙嚴寺九世伊堯和尙の敎化を受け、久しく豐川吒枳尼眞天を信じて居

たので、其の軍艦中の一番大きいのを特に伊堯丸と名付け、艦中に豐川吒枳眞天を安置して、武運長久を祈つたが、戰爭中幾度か不思議の靈驗があつて目出たく大勝利を博した。

徳川家康は三河の人として幼少の折から殊に尊信して、常に武運長久を祈つて居たが、慶長五年九月關ケ原の戰陣に赴くや伊堯和尚をして戰勝を祈禱せしめた。幸ひに靈驗あつて目出たく大勝を得、天下は全く徳川氏の手に歸したので、その報賽のために寺祿四十九石を增進せられ永く寺門を保護せられました。

徳川幕府の名判官大岡越前守忠相は、久しく妙嚴寺十九世萬牛和尚に歸依して、篤く豐川吒枳尼眞天を信敬し、常にその御靈告に依つて最も公明快達なる判決をさるゝので、聲望一世に高く、益々榮達されたが感激に堪へずして遂に眞天の祠堂を我が邸内に祀り、日夕敬禮怠りなく密に冥助を乞ふて居た。爾來祈願變ることなく、大岡家は最も熱心な眞天の信者として、引續いて明治維新に至つたが、偶々明治九年私邸の神社佛閣は衆庶の參拜を禁ぜらるゝの官令あるに及んで、改めてそれを大岡邸に近い赤坂區表町に奉祀して當山の出張所とした。明治維新の際神佛分離の發令せらるゝや、廢佛毀釋の暴勢に乘じて所々の名山大刹が多く神社になつた時、我が妙嚴寺をも亦神社の手に奪はんとしたが、時の住持靈龍和尚及び弟子默童禪師相共に熱心に『吒枳尼天はもと佛法守護の善神なり。且つ寒巖禪師の明かなる歴史あり。決して神社たるべきものに非ず』とて確乎不拔の信念を以て能く有らゆる迫害、誘惑、辛苦に堪へ、眞天の冥助に依りその厄を免るゝことを得た。從是先伏見宮及有栖川宮兩家の御祈願所となり、熾仁親王は御自ら「豐川閣」の三大字の額を賜ひ、いよ〳〵敬虔なる信念を寄せらるゝに及び一層高貴の御關係を結ぶに至つた。これより寺門益々繁榮し眞天の威光いよ〳〵盛んにして今に及んだ。

以上は寺傳で、今茲に考證批判を加へることは避けるが、江戸時代も後半期から以後漸く隆昌を來したやうである。

此の寺の信徒詰所とも云ふべき棟には、廣大な部屋が數多くあり、一度に千二百人程の配膳が可能であるといふ大調理場がある然も二時間あれば完全に其の目的を達するとの事であつて、益々其の規模の大なるを感ぜしめる。

本堂に案内された時は、丁度其處で祈禱が行はれて居る眞最中で、讀經につれて痛い聲が聞え、太鼓が更に氣勢を副へて居た本堂の奥には淨聖堂安置の國寶の地藏菩薩立像が出してあつて、偶然にも拜觀することが出來たのは仕合せであつた。又東伏見宮并に有栖川宮御寄附の御厨子、及び有栖川宮熾仁親王殿下御筆の「豐川閣」の二大字の額も掛けてあつた。此等御尊信の現れの中に、かの不思議を以つて有名な二升炊きの「御供釜」が黑く鈍い光を放つて居た。

尚茲に吾々として特筆して置きたいことは或る部屋に福澤先生の寫眞と「獨立自尊」の自筆とが額として掛けてあつたことである。これは前住職の方が塾出身であつた關係からであらうが、一行をして殊に感慨深からしめるものがあつた。更に今日は折からの早慶野球戰の放送で寺のラヂオは慶應の應援で賑はつて居た。

本堂を出て庭に出た。粹をこらした結構は吾々に好奇の眼を見

張らせる。狐を刻んだ石像の前を幾つか通つて新境内に出た。植林された眞中に「中西蟠龍樹木培艱標」が立つて居た。

新境内を出て、櫻の並木路を少し行くと、當寺社會事業の一つである豐川學堂に突き當る。山口氏は此處の教師をして居られるので、特によく内部を見せて下さつた。當學堂は五年制で夜間學校である。全校生徒數は二百五十人程で、生徒の所屬は寺關係一に對して、一般外部が三の割合ださうである。校舍は新築の香も新しく、氣持の良い教室が南面して居る。當學堂は他の一般中學校に比べて、大した差は無いが、銃器庫に三八式歩兵銃が整然と納められてあつて、教練が實習されるのには一同思はず微笑した。併し誰かゞ『叡山の僧兵』と呼んだ時、此の微笑は次の瞬間哄笑に變つた。

妙嚴寺で思はず長時間を費した吾々は、釣瓶落しの秋の日を忘れ、早く旅館に着かうと午後四時豐川發のバスで蒲郡に向つた。小型なバスに一度に九人增えたので、實に超滿員である。立つて居る吾々は、車輪が凹地に落る毎に、頭を天井にぶつける。此の調子で一時間も搖られてはと思つた瞬間、バスは三谷手前で故障を起し、夕闇迫る街道に腰をすえてしまつた。救援の自動車が來る迄三十分程かゝるさうだ。腹が段々空いて來る。夜の幕が足早に吾々の頭上に降つて來る。日暮れて道遠しどころの騷ぎではない。

此處で思はぬ忍耐力養成の實習を行はさせられた吾々が、救援の自動車で今夜の塒たる健碧館についたのは、七時に近い頃であつた。然し早慶戰に勝つたラヂオのニュースを聞くと、一同自動車事故に得た悒鬱は何處へやら海邊の此の旅館に賑かな一夜を過した。午後十時就寢。（丹羽幸一記）

十一月二日（月）

磯を洗ふ波の音に目を覺せば、空は拭つた樣な快晴である。朝風に震へながら、一同どてら姿で記念の撮影をする。此の朝宿屋で落合つた西岡君を加へて、九時廿二分蒲郡發列車で先づ岡崎に向つた。同四十七分岡崎驛着、驛前より自動車二臺に分乘して、十町程距つた勝鬘寺に至る。此の寺は寺院明細帳によれば推古天皇の朝、聖德太子の創建と傳へ、もと天台宗に屬した。嘉禎元年柳堂での親鸞の說法（妙源寺の條參照）を聽いた當時の住僧了海は、それに動かされて弟子と爲り、以來眞宗に歸したことは諸書の記す所である。永祿六年十月の參河一向宗一揆の際、上宮寺に加擔し、爲めに一度廢絕したが、後許されて再興し、今日見る本堂は元祿七年に建てられた。當寺には一向一揆に關する記錄として、

一、永祿一揆由來（一卷）

一、永祿戰役之住持青林院了意事蹟書翰控（一卷）

があり、其他所藏の文書類の主なるものは次の如くであつた。

一、九月十七日付教如書狀（勝鬘寺宛）

一、正月廿日付、及び正月廿八日付實如書狀（共に自筆にして勝鬘寺宛）

一、十二月三日及び極月十二日付顯如書狀（共に勝鬘寺宛）

一、正月廿二日付、政月廿二日付、正月廿五日付、閏正月四日付、十一月四日付、十二月二日付正月廿八日付、二月二日付

（以上何れも勝鬘寺宛）二月三十日付（滿千代宛）六月十八日付、十二月一日付、十二月四日付、十二月七日付、證如書狀（何れも勝鬘寺宛）

一、大久保家圖（忠任迄）　一卷

一、當寺諸記錄（一卷）

一、織田家系圖（一卷）

一、本願寺系圖（一卷）

一、教如上人當山御入之節僧俗連判狀并御宿割其ノ他（一卷）

（五月廿二日付、坊主中門徒中より勝鬘寺殿樣充に差出し、不參坊主衆の處分を要求せるもの）

一、遠州濱松勝鬘寺古書（一卷）（承應二年癸巳二月二日付、三州之勝萬寺より太田備中守樣御奉行所充に出せるもの）

一、柳堂本尊古記（一卷）

一、竹田祕方（一幅）

防風圓

（中略）

天正八年庚辰閏三月廿五日

此祕方從後奈良院爲甘露寺亞將勅使靈雲院大休和尙御相傳其外月航和尙御相傳也可祕〻〻者也仍如件

慶長六年壬霜月廿一日

今川伊豆守氏朝（花押）

一、本願寺綽如上人分派勝鬘寺系圖（一卷）

一、古良本法寺御勘氣吉田誓念寺御草創書類（一卷）

辭して寺を出で、自動車に來て見れば、小春日和の陽を受けて運轉手等が舟をこいでゐたのも珍であつた。田舍道を走る事暫し矢作橋を渡つて右に折れ、約三十分にして十一時半桑子の**妙源寺**に着いた。親鸞聖人說法舊跡柳堂の石碑を左に見て山門を入る。有名な國寶法然上人繪傳（三幅）國寶親鸞上人繪傳（三幅）國寶善光寺如來繪傳（三幅）を見せてもらふ。何れも絹本着色であるが、可成り甚しい損傷を受けてゐるのは惜しいことである。此の寺は參河一向一揆の際家康が本陣を置いた所なので、家康との關係が深かつた。今日東京芝の增上寺に安置され信仰を集めてゐる黑本尊は元來此の寺にあつたものである。黑本尊所望狀と稱せられる三月廿六日付明眼寺充家康（花押）の書狀が今も殘つてゐる。書面の內容に黑本尊を自分の所に貸してもらひたい、決して他寺に渡すのではないからと斷つてゐるのは、如何にも政治家らしい彼の才智が窺はれて面白い。以上の外此の寺で見た古文書は、

一、正月十六日　信長（黑印）書狀　明眼寺宛

一、十二月五日　義元（花押）書狀　明眼寺並に阿部與五左衞門宛、

一、傳親鸞筆九字名號（南天不可思議光如來）

十祖御影

八祖御影

一、親鸞門弟交名（一卷）（奧に右親鸞上人門弟等交名大概注進如斯　康永三年甲申十月廿九日書寫之とあり）

等であつた。寶物の見學を終つてから、本堂前右手の國寶太子堂を見る。親鸞說法で名高い柳堂は卽ちこれである。一體此の寺は親鸞巡遊の時桑子城主安藤薩摩守信平が之を城中の太子堂に請じ

て説法を聞き、動かされて自ら佛門に入り、念信坊蓮慶と號し、城を弟親行に讓つた時、城中に建立したものである。柳堂の建築は一般に室町時代と言はれるが、時代を決定する重要な一材料として棟札が殘存してゐる。

奉　桑子專修念佛柳堂
　　加修理太子堂上菁等滿于時正和三年八月六日平田住持慶念
　　門徒衆等菩提也

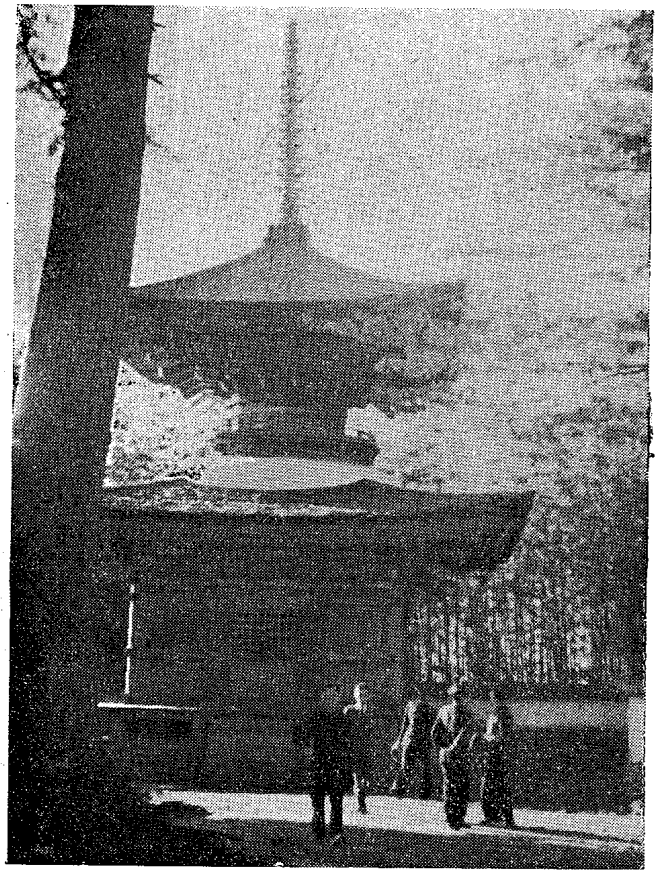
此の棟札は鑓鉋でけづつたものらしく、その文字は今日肉眼での解讀が殆んど不可能である。幸ひ裏面に上記の通り寫記されてゐる。果してこの寫記が正しいかどうかは、赤外線寫眞の判定にでも俟たねばならぬが、若し右の通りとすれば、柳堂は正和以前に出來たことになり、從つて鎌倉時代のものと爲さねばならない。尙ほ右の外にも太子堂修理に關する慶長十八年、寛政元年の棟札が藏されてゐる。

柳堂は三間三面、單層、屋根四注造、柿葺で、內陣に安置された聖德太子立像は木造、胡粉彩色で、江戸時代の修補は加へられてゐるが、室町末期の一佳作とせられてゐる。柳堂の奧手に墓地があり、安藤、本多、高木、長坂等諸家の基碑が多く現存してゐる。

時既に午を過ぎて、腹のへつた一同を乘せた車は一路岡崎公園に向つた。卽ち**岡崎城趾**である。此處は矢作川と男川に圍まれた要害で、享德元年額田郡大草の城主西鄕稠賴の築く所、松平淸康が入つたのは大永四年であり、天文十一年にこの城內で家康が誕生した。城趾は比較的破壞を免れ、天守閣の礎石を始め、石垣、

湟濠の如きは可なりよく保存されてゐる。本丸趾には大正天皇御野立所、今上陛下御野立所の石柱が建つてゐる。本丸の東南風呂谷には家康產湯井と稱せられる井戸が殘つてゐる。かくて漸く食卓につき、元氣を回復して二時半此處を出發した。午後の第一目的地は岩津村の**大樹寺**であつた。當寺は淨土宗の名刹で、文明七年岩津城主松平親忠が菩提所として創建したもので、開山は勢譽愚底上人である。天文二年十一月の後奈良天皇の勅額をかゝげた山門をくゞり、廣い境內に入る。創建後天文四年淸康が再建し、同十九年勅願寺に充てられ、寛永十五年から十八年に亙つて重修せられたが、安政二年祝融の災にかゝり、山門と後記する多寶塔を除き悉く烏有に歸し、再び改築せられたものである。案內の老僧の說明を聽きつゝ巡覽する先づ入つた正面に立てかけてあるのが細井廣澤の屛風と冷泉爲恭の障子畫である。安政年間爲恭は此寺に在留してゐたので、多くの大作を殘してゐる。鶴、麝香猫、鐵仙、牡丹等を畫いた部屋を巡々と見る。圓融天皇子ノ日御遊圖、三條左大臣實房公革狩圖等もある。餘り數が多いのでやゝ閉口しかけた一同の目に留つたのは、祖洞坊降魔杖と說明の附いた八角の杖である。これにはこんな話が傳へられてゐる。永祿三年五月桶狹間役の後、家康は岡崎城に歸るに先立ちこの寺に入つた。所がその月の二十二日信長は急に來つてこれを攻め、時の住持登譽は厭離穢土欣求淨土の八字の旗をおし立てて衆僧を勵ました。この時祖洞といふ豪傑坊主あり、大力にまかせて家康が切りつけた山門の貫木と自分の杖とを左右に持つて討つて出で、敵を退けたといふ杖が卽ちこれである。重さは五貫目あるといふ。皆持つて

見て感心する。この杖に刀痛があるといふことであつたが、はつきり見當らなかつた。其他廣忠・家康・秀忠三代の厨子、もと三河福林寺にあつた梵鐘（文和二年在銘）が保存されてゐる。境内には天然記念物に指定の家康手植の椎、松が繁つてゐる。又本堂の左裏手に最初の岡崎城主松安院殿親忠以下德川祖先三河入の廟所が



ある。向つて左端に一基分の餘地があるのは家康のためだつたといふ。次に本堂の前面にある多寶塔を見る。特別保護建造物に指定され、天文四年淸康の建立で、幸ひ火災を免れたものである。

此の寺はかくの如く德川氏と深い關係があつたので、室町時代以後の綸旨、判物、朱印狀や開山自筆の辭世など古文書類に富み一同も相當期待して行つたのに平時は見ることを許さず、且つ住持も不在であつたゝめ遂に見學することが出來なかつたのは頗る殘念であつた。かくて三時半大樹寺を辭し、車を北に走らすこと約四十分、遙かに木曾御岳を望んで進み、途中擧母の町を過ぎ、舞木古塔趾の標柱を右に見て、四時十分**縣社猿投神社**に着いた。刺を通ずれば石上社司の「もうお出でになるか〳〵とお待ちしてゐました」との挨拶に一同恐縮する。先づ別殿に案内されて茶菓の接待を受け、社司より神社のこと、猿投村のこと等に就いて聽く。それによると神社は吾々の今居る本社（通稱下ノ宮）とこれから約五十町距つた山上にある東ノ宮、西ノ宮の三つがあり、東ノ宮と西ノ宮の間は約八町ある。西ノ宮の背後に祭神大碓命の御陵墓と定められた丘域がある。石垣を積み石造の玉垣が周らしてあるといふことである。九月九日の祭禮を里俗、御葬儀といひ、社僧旌天蓋及び葬具を用ひて恰も葬儀の樣なのは、御墓所に葬儀を營む意味とされてゐる由である。この猿投神社はその勸請が不詳で社傳によれば仲哀天皇の元年勅願によつて大碓命を猿投山下に祠るとあり、山上の東ノ宮は更にそれに先立つこと六十年、成務天皇の御宇と傳へ、西ノ宮は一說に白鳳十三年といふ。何れにしても延喜式内の古社で、その正史に見えてた始めは文德實錄卷三、仁壽元年冬十月乙巳の條に、『進二參河國知立。砥鹿兩神階一。並加二從五位上一。糟目。日長。獻投。野圓。……等十一神。並授二從五位下一。』とあるのがそれで、更に三代實錄卷八、淸和天皇貞觀六年二月十九日丙子の條に、『授二參河國從五位上知立神。砥鹿神。並正五位下。從五位下狹投神從五位上』と見え、以後貞觀十二年八月

廿八日戊申に正五位下、同十八年六月八日癸丑に更び正五位下（これは誤記かとも疑はれる）、元慶元年閏二月二十六日戊戌に從四位下をそれ〴〵授けられてゐる。尙ほ社號も延喜式には狭投神社と見え、國內神名帳には正一位猿投大明神とあるが、當社所藏の古文書には多く猿投宮と記されてある。現在の猿投神社となつたのは明治元年三月のことであるが、一般には明神樣と言つてゐる。

一休みの後拜殿に向ふ。途中に方三間の塔礎石が殘存してゐる。これは以前神宮寺が境內にあつて、その三重塔の趾だといふ。參拜の後、拜殿の側に特に吾々の爲めに陳列せられた寶物及び古文書類を拜見するその主なものを次に記す。

一、猿投之本緣孰惟云々
　寶龜十年末己巳二月十日　大伴家持
一、國內神明名帳
一、古文孝經（一冊）
　書本云承安四年甲午云々
一、社家目錄
一、白紙文集卷　第三、第四（三卷）
一、八講出仕付次第（一卷）（貞和二年より觀應元年に至る）
一、八講饗膳日記（一卷）（觀應元年より文正元年に至る）
一、八講牒（一卷）（文明元年より明和四年に至る）
一、八講牒（一卷）（天保八年より慶應三年に至る、內十八年間缺）
一、結塔印觀世七尊種子變成云々（一卷）（奧書に寬元二年二月一日於西山法華寺之內奧慈院始自亥時云々、金剛佛子賴賢）
一、延文四年己巳正月十五日修理米下行日記
一、猿投八講頭役帳（貞和五年　十一月十五日）
一、勅額（表）正一位猿投大明
　（神）裏嘉元二年甲辰八月一日辛巳書之左近衞權中將源賴忠
一、傳授書　巡禮八師了　承和　三年己丁三月三日書了
一、祕說伎藝尺（康安元丑歲十一月）
一、古文書五十通
　（昭和十年九月廿一日、小栗齋藤兩氏調査の分、略そ文永より天正迄）
一、古文書三十九通
　（昭和十一年一月十日、十一日右兩氏調査の分、略そ建仁より慶應三年迄）
一、馬面（一）（三箇之內、慶長六年丑七月濃州那田尾佐藤才次郎直信寄附）
一、鏡（一）（傳來不詳）

到着の時が遲く、且つ意外に多くの文書があつたゝめ、詳細は他日を期し、石上氏の案內で社殿を拜觀し、更に本社の脇から登つて、元の神宮寺（今、門だけ殘る）本尊彌陀座像、千手觀音立像を安置する觀音堂に至り、此等の佛像を拜觀する。殊に堂の前に鳥居が立つてゐるのは吾々の注目を惹いたことであつた。遙に東西兩宮の鎭座ます山上を拜して本殿に戻れば、落ちるに早い秋の日は既に西に隱れて、鬱蒼たる老樹に圍まれた神域にはひし〴〵と寒氣迫り、身の震へるのを止むべくもなかつた。社司は自動車の所迄見送られて心からの別れの挨拶を交し、一同は手厚

い歡迎を感謝しつゝ、鳥居を後に一路岡崎へと急いだ。途中、往訪を約した學母の長興寺に遲刻の挨拶だけでもしたいと思つて立寄つたが、土地不案內の爲め暗夜の田舍道をぐる〳〵迷つたのみで徒勞に終つた。岡崎驛に歸着したのは六時半近く、驛前で一休みの後、一同熱田迄行つて夕食を共にし、解散することゝなつた。かくて二日間の見學旅行は無事に終了した。此度の旅行も例によつて忙しい見學を續けたが、參加者一同の人の和によつて極めて愉快に完了出來たことは誠に喜ばしかつた。終りに本旅行に於て各方面で與へられた御好意に對し厚く感謝の意を表します。

（中井信彥記）